

Hughes, R. (2011). *Teaching and Researching Speaking*. (2nd ed.) Edinburgh Gate, UK. Pearson Education.

Ch.1. Issues in teaching and researching speaking. (pp. 3-27).

1.1. Introduction

- この章では、特定の言語理論と実践における様々な点で社会における話すことについての相違点を時代ごとの状態にそって論じている。
- 本書では、20世紀において、応用言語学と広い研究領域によってまとめられ、言語科学のもたらした「スピーキング」と「言語」の概念を取り上げている。
- 如何に形式(form)が評価され、教えられ、調査されるかということがそれらの概念によって影響を受けたが、そのことはこの後の章で取り上げられる。
- 本章では、この過程を説明し、なぜそれが重要か、逆説的になぜ言語学の理論の中で話すことの機能の明示的な注意の欠如を導くのか説明する。
- 20世紀における概念的、歴史的な概観についても論じられている。

1.2. The skill of speaking

1.2.1. Speaking is not a discrete skill

- スピーキングの研究における固有の困難な点はかなり多く、それらは他分野と重なる。
- 例えば、どの程度会話の構造が文化的に測定されるか、という点である。
- スピーキングにおける文法と語彙はどの程度他の種類の文法と異なるのか(syntax, semantics)
- 何が話すことの流れにおける不可欠の要因なのか (prosody, phonetics, phonemics)
- 本書では、スピーキングの特定領域をそれ自身と関連する、全体的、または談話レベル、構造のレベルと発話のレベルの区別を明確に分割することを試みている。

1.2.2 Teaching speaking is not easily separated from other objectives

- 話し言葉が教室アクティビティの焦点である場合、教員はしばしば他の目的を持つ。
- 例えば、タスクが生徒の気づきのための訓練となること、言語知識の観点、発話能力の発達のため、社会言語学または語用論的観点の認識のため、といった点の手助けとなることが挙げられる。

1.2.3 Teaching speaking versus using speaking to teach

- 教師が「言語の口頭の形式を教える」か「スピーキングを通じて言語を教える」ことに従事しているかというのが問題である。これらの違いは些細かもしれないが重要である。
- 口頭の言語形式の研究は、文法が一定のレベルにあるかどうかという研究、または、広いジャンルの研究においても不十分であった。
- 口語のジャンルがどのように構造化されているか、どんな形式が最も典型的であるかという概念の確立は難しい。
- 教室内では非常の多くのスピーキングが行われるが、それらは全体的スキルを対象とし、スピーキングの効果的指導とは異なる。
- これらの要素は話す技能から独立して教えられることもある。
- それらはインフォーマルな会話の言語の機能例として表現されるが、学習者は一般に、混乱を起こすことな

く表出を達成するには、発話能力のレベルが極端に低い場合、それらが機能の例として表現される。

- そのような場合、‘mm’のようなフィラーを使う効果的なタイミングとイントネーションといった、会話ストラテジーの教授がはるかに望ましい

1.2.4 Insight from speech corpora

- 自然言語コーパスと言語処理が統合されることでスピーキングとは一体何なのか理解することで、我々の理解の補助となり、教室内で話すことの目的が、根本的に次の 10 年間で大きく変わるだろう。
- コーパス研究から、書き出されたアカデミックな談話における法動詞の研究が最初に行われる。
- 次に、文脈上で使われるディスコースマーカ―としての前置詞に焦点が当てられる。

1.2.5 Bridging the facets of speaking together

- 人間の声とスピーチの能力は生得的に個人の中で強く結ばれる。
- 目的言語に存在する文化、社会的相互作用の丁寧さの基準は関連する。
- 他の言語で上手にコミュニケーションすることを学ぶために、学習者は彼らが文化、社会、そしてさらに政治的な要素といった領域で新しい意見とともに正しく話すための言語選択を必要とするとき、彼らの認識を変える、または広げる必要がある。
- そのため、本書では話すことの‘layers’の違いをしばしば取り扱う。それは、談話、語彙、音韻などであり、分析の目的によって異なる。根本的なテーマは教師が究極的に学習者を初学者から流暢な L2 話者にするために必要な補助をコミュニケーションという意味でそれらの要素を新しく与えるか、統合するか、適切にもたらすか、というものである。

1.3 The nature of speech in contrast to writing

- Figure 1.2 と 1.3 は一般的な口語と文語の形式を対象化したものである。
- 最初の図は以下に 2 つの形式が発生したのかという (Aspects of production) に関連し、2 つ目のものは社会的な局面の 2 つの形式の傾向について示されたものである。

1.3.1 How speech reaches the world

- 口語が文語と反対であると考えられる場合、いくつかの特徴が明確になる。
- 最も重要かつ、一般的なことだが、テキスト・音声データによって支配された言語訓練は、基本的にどんな言語の交互形式においても、事実上、非常に短期間のものである。
- 事象が発生した時の話し言葉は、特定の場所や瞬間、録音などという方法はあるが、決して繰り返されることがない。
- スピーチの性質は要因に裏付けされ、言語選択に影響を及ぼし、口頭・聴覚のチャンネルを経由して伝えられる。
- 話し言葉が対面形式、またはテレビ放送か、他のメディアを媒介しているかどうかで、聞かれる (聞くべき) 話し言葉はかなり異なった形式で作られる。
- 口頭発表における最も一般的な問題は、聴衆にとっての情報過多である。
- スピーチ方法のさらに顕著な傾向は、spoken channel の瞬間的かつ状況の特性に関連して繰り返されることである。
- 膨大な spoken material の大部分は、自然発生的、対面での、インフォーマルな会話である。

- 会話は一方の話者によってガイドされ、もう一人によって特定の話題として扱われるかもしれない。しかし、リアルタイムの文脈は、話者の間だけでなく、談話と文脈の間でもギブアンドテイクの形態をとる。
- トピックとトピックの変化がいかに関者によって管理されるか、どのように話者は互いに適応するか、どのように話者間の誤解が修復されるか、どのように活動が言語生成に影響するか、どのように新旧の情報を会話中で織り交ぜるか、などが研究の対象となっている。
- 対照的に、モードの違いが言語の変動を説明する上ではるかに重要だとするものもある。(see, e.g., Biber, 2006, chap.8)
- 準動詞と節の特徴の記録は話し言葉が大部分であり、書き言葉として残されているものはまれである。

1.3.2 How speech is regarded

- Figur1.3は特に文学社会（フィクションなどの一般的な話し言葉・書き言葉）においてみなされる典型的な話し言葉の姿勢である。
- Vackek(1973)は書き言葉は個々の、そして完全に独立した言語システムであり、話し言葉の形式は、一般的に書き言葉の形式に依存するものである、としている。
- 声を出して読んでいるときにテキストが理解できないのなら、書面であっても理解はできない。なぜなら、書かれているものは単に口頭発表されたものを記号化したものだからである。
- インプットのソースとして'communicative approach'口頭の形式に大いに影響力を持ち、言語学で言うところの「言語」と「話すこと」が完全に互換性のあるものであるかのようにそれらが統合された。
- この考えはL1習得の理論の領域のものであり、それがL2習得の理論に影響を与えた。
- 子どもは話すことを学ぶ前に書くことを学ばないため、話す形式が唯一評価されるものである（子供の時点で）。そのため、「言語」と「話すこと」を区別することは的外れであるとL1習得の研究では考えられてきた。
- しかし、逆説的に、言語学の世界と言語教育の場における特有の弁別的基準によって話すこと自体には注意が払われてきた。
- リスニングの教授と研究については（スピーキングと）似た「不可視性」の要因がある。
- 生まれつきの普遍的な人間の話すことへのキャパシティは言語学への関心を導く中心であった。口頭の形式が言語学の理論において高い地位であるのに、その立場は不明瞭なものである。
- 書き言葉の性質と機能は一般に話し言葉のそれよりも高次のものとみなされてきた。
- 瞬間的でない書き言葉の性質は社会において論理的・契約的な機能をもたらし、その一方で話し言葉はよりインフォーマル、または修辭的なものとして使われる。
- 言語の口頭形式は言語を革新（変化）させるための実際の現場である。
- 話し手はお互いにそれぞれの言語活動を適応させる。単語や文法などの特徴は一般的に話し言葉の中で生成される。
→携帯電話でのメールやチャット、テキストメッセージなどの技術が広まったことで、書き言葉も同様に变化した。

1.4 Where does speech fit in language studies?

- 「言語能力」と「スピーチの能力」の言語学的概念の学問はともに崩壊する傾向がある。
- 言語能力'competence'と実際に話すことや書くことのように言語を使う能力'performance'というようにス

ピーチは二分される。

- 本質的にこの区分は Chomsky が疑問視した、どのように子供は言語をマスターできるのか、というものに基づき、最終的にどんな話者もほとんど完全に新しい談話を生成し、理解するというものに基づく。
- 行動主義モデルに対して、最近になって、言語能力が一見多様なものであっても、生物学的、遺伝的に人間が持っている生得的なものであり、明らかであるという概念が 20 世紀に開発された。→この考えは生まれつきの認知モデルに基づく。